

非認知能力と「保育内容 人間関係」の 関連性に関する一考察

A Consideration on the Relationship Between Non- cognitive ability and Childcare content human relations

徳増 全矢

Masaya Tokumasu

はじめに

日本保育学会の大会テーマに非認知能力研究が掲げられるなど、幼児期における非認知能力研究の重要性は日を追って強くなってきているように感じる。ただし、非認知能力自体は非常に多様性に富んだ考え方であり、さまざまな課題を内包していることは、「人間力」¹⁾や「キー・コンピテンシー」²⁾「グリット」³⁾といった新たな能力の概念が議論になっていることや、その概念や測定の課題が議論になっている点からも想像される。その名称ですら Non-cognitive “ability” なのか、“skill” もしくは “traits” なのかも議論の対象になっている状況である。しかし、様々な議論がある中においても、非認知能力の育ちが早期段階、特に幼児期の介入が効果的であることが言われてきている現在、幼児期の育ちに合わせた概念として保育に導入していく視点は非常に重要であると感じている。

また、平成30年改訂の幼稚園教育要領によって示された「幼稚園教育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、“目標の達成”や“他者との協働”、“情動の制御”などといった非認知能力の基本的な視点を多く含んでおり、幼児教育と非認知能力との関係性が強まってきていると感じられる。

本稿では、多様性に富んだ非認知能力のとらえを「保育内容 人間関係」の視点で見直し、非認知能力と幼稚園教育要領にどのような関連性が見られるのか、文献研究を通し整理しながら明らかにしていくことを目的とする。

非認知能力のとらえ方について

「非認知能力 (Non-cognitive ability)」は、Heckmanが紹介したペリー就学前プロジェクトという

長期的な介入研究による結果によって、大きな注目を集めるに至った。そもそも、研究の開始時点では非認知能力という言葉は使われていなかった。非認知能力は Bowles & Gintis (1976)⁴⁾ によって社会学の分野で紹介された概念であり、上記論文では非認知能力は認知能力に対応し、態度・動機づけ・パーソナリティといったものを、社会的成功を予測する因子として紹介されている。この概念をもとにした形で Farcas (2003)⁵⁾ や Heckman (2006)⁶⁾ はその研究で、非認知能力が社会的行動（犯罪率や生活保護受給率など）や健康（身体的・精神的）にも大きな影響力を持つと主張するに至った。貧困層のアフリカ系米国人を対象に追跡を行い、犯罪率や生活保護受給率を比較したペリー就学前プロジェクトの基本的な考え方と、社会的な成功を予測する因子としての非認知能力概念が、長い間の研究の中でつながった結果、現在のような広がりを見せていると言えるであろう。

ペリー就学前プロジェクトの結果は、いくつかの課題を抱えながらも、大きな衝撃として世界に受け止められた。OECDではこの結果を受け、より方向性を明確にした形でレポート⁷⁾を発行した。その中で、あえて OECDでは認知的スキルに対する社会情動的スキル (Social and Emotional Skill) という概念を想定し報告している。その背景には、非認知能力のとらえ方が多様性を含み、固定化しにくい概念であることが伺える。現在においても議論は盛んであるが、本稿では非認知能力と「保育内容 人間関係」のとの関連性を考えるうえで、「社会情動的スキル」の概念を基本としてとらえることで、より関連性が明確になると想定し、非認知能力の占める一つの要素として論じていくこととする。

社会情動的スキルは、個人や集団に利益をもたらす「能力」として明確にされており、認知的スキルと互惠的な関係をもちながら、育ち合っていく。OECDレポートによると、社会情動的スキルは生涯を通じて発達させることができるとされ、乳幼児期を過ぎてから取り組み始めても遅くはない。しかし、幼少期に強固な土台を築くことはとても重要であり、その影響は大きいとされている。このことは前述のペリー就学前プロジェクトの結果からも見て取れるであろう。実際のペリー就学前プロジェクトでは、社会情動的スキルにおける就学前からの介入が、子どもたちの経済状態や生活の質を高めるためにひじょうに重要であることが示される結果となった。日本の相対的貧困率⁸⁾は決して低い状況ではなく、子育て環境の悪さや子どもの社会不適応問題を抱えることが懸念される。日本においてもこのプロジェクトの結果を重視し取り込む必要があるであろう。

社会情動的スキルは、「(a) 一貫した思考・勘定・行動のパターンに発現し、(b) フォーマルまたはインフォーマルな学習体験によって発達させることができ、(c) 個人の一生を通じて社会・経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力⁹⁾」(図1)である。そして、「目標の達成(忍耐力、自己抑制、目標への情熱)⁹⁾」、「他者との協働(社交性、経緯、思いやり)⁸⁾」、「情動の制御(自尊心、楽観性、自信)⁹⁾」という三つのスキルを持つ。この3つのスキルをもとにした「人間関係」のとの関連性は次の章で述べていくこととする。

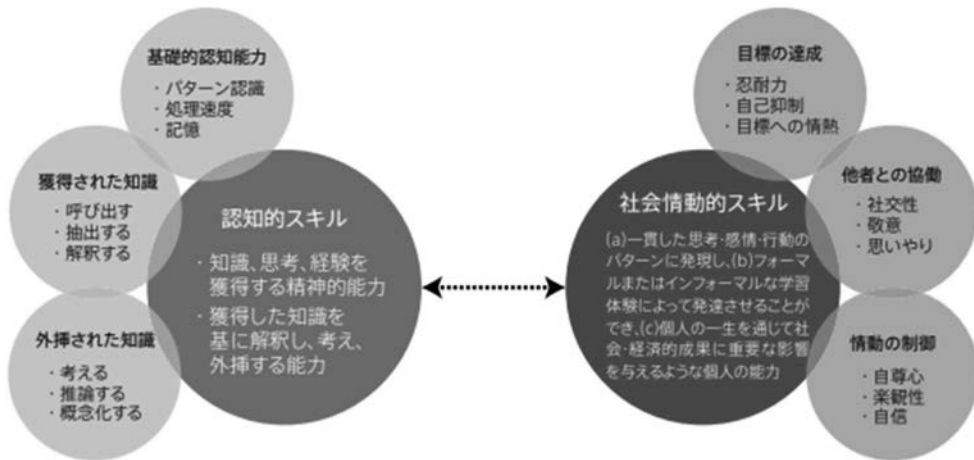


図1 認知的スキル、社会情動的好スキルのフレームワーク

出典：池迫浩子・宮本晃司（2015）。家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成
国際エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆。ベネッセ総合教育研
究所訳。OECD Education Working Papers, No. 121, OECD Publishing.

「保育内容 人間関係」と非認知能力との関連性

幼稚園教育要領などに示されるように、乳幼児期における保育は、子どもの健全な心身の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである。実際に、乳幼児期の教育・保育が生涯発達の基盤を培う重要な役割を果たしていることは、これまでの日本の保育でも示されてきたと考えられる。特に「心情・意欲・態度」を重視して、日本独自の非認知能力を作ってきたとも言えるであろう。その独自性には、次のような課題があると無藤¹⁰⁾によって示されている。一つ目は、「粘り強さ」や「挑戦する気持ち」などの育成が、「意欲」や「興味・関心」に比べると重視されていないこと。二つ目は、認知能力と非認知能力が互いに絡み合うように伸びるという認識が弱いこと。三つ目は、意欲や関心を持って能力をもって粘り強く取り組むことで、自然に深く考えたり工夫したり創造したりして認知能力が高まるというサイクルについて、スキルではなく「気質」や「性格」をベースに考えられてきたということである。この指摘から、幼児教育ではスキルとして非認知能力をとらえ、保育者がその成長を支える姿勢が重要であることが言えるであろう。

人間関係

〔他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て人と関わる力を養う。〕

1 ねらい

- (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、関りを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
(身近な人と親しみ、関りを深め、愛情や信頼感をもつ。(平成20年改訂))
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

2 内容

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく活動する中でできまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

目標の達成 他者との協働 情動の抑制 ※下線筆者

図2 平成30年改訂 幼稚園教育要領「人間関係」ねらい及び内容

図2において、「保育内容 人間関係」のねらい及び内容と三つのスキルとの関連性について示す。なお、社会情動的スキルで言う「目標の達成」にあたる部分を波線、「他者との協働」を点線、「情動の抑制」を実線で示した。

このように示してみると、社会情動的スキルと「保育内容 人間関係」は各ねらい・内容の段階においても密接に関連していることが見て取ることができる。前述した無藤¹⁰⁾は、日本の保育におい

ては社会性や思いやりなど子ども同士の人間関係の比重が大きいと述べているが、人間関係の内容を見ていくと友達とのかかわりが重視されている状況を確認することができる。

「保育内容 人間関係」は、多様な人々と関わる経験を通して、“人と関わる力”を養うとともに、“自立心を育てる”ことも含まれており、協働することと自立することが相互に絡み合って発達することを前提としている。具体的には、自己発揮が認められる経験を通し、自己肯定感をもって行動できるようにすることや、友達と力を合わせて一つの目的に向かって取り組む協働性、および自己主張と折り合いをつけて体験をする中で規範意識の芽生えや自己調整力を育むことなど、長期的な発達の視点に対し影響力のある非認知能力が関連していると言えるであろう。

また、今までの改訂でも提案されてきているように、日本の保育では社会性や思いやりなど、いわゆる“子ども同士の人間関係”に重きを置いて展開されてきている。そのことは、日本の保護者が、友だちと遊べることを重視する傾向がある¹¹⁾ことから、あらためて社会的な傾向から確認できるところである。ただし、その傾向が強いことで、前述の無藤が述べているように“自立心を育てる”側面が弱いことも指摘されている通りである。なお、20年と30年の改訂において変更になっている部分は、ねらいの(2)であり、「工夫したり、協力したりして、一緒に活動する楽しさを味わい」という記述が追加されている。

日本の保育では、非認知能力の重要性が叫ばれる以前から、非認知能力と近いもの(例：思いやりや親しみなど)を重視して保育を行ってきており、特に人間関係領域はその主な役割を担ってきた。このことは、幼稚園教育要領の記述を見ても読み取ることができる。非認知能力を育む上で、「保育内容 人間関係」は特に大きな役割を果たすと言えるであろう。非認知能力に対する日本独自とも言える視点を充実させると共に、子どもたちが自ら考え自ら行動する体験などを増やすなどの工夫を付加していくことで、さらなる充実を可能にすると考ええる。

非認知能力を育む保育者の専門性と「保育内容 人間関係」

「保育内容 人間関係」の内容部分では(図2)、まず「先生」との関係性が示され、先生との信頼関係が人間関係の基盤となることが示されている。そして、子ども同士の関係性が深まり、広がりを持つことによって、様々な衝突や葛藤が生まれる。その際にも、保育者との信頼関係やその存在が、子どもたちの行動の支えになることは多くの保育者が実感しているところであろう。保育者の支援のもと、子どもたちが充実した生活を送る中で「目標の達成」「他者との協働」「情動の制御」といった非認知能力も発達していく。したがって、非認知能力を育むためには、保育者自身が非認知能力を専門性の観点からとらえ、実践する能力を持つ必要があるということが言えるであろう。保育者は子どもたちにとって人的環境の一つであり、非認知能力を育む重要なモデルでもある。その影響が大きいことは肝に銘じておくべきであろう。そして、人間関係の領域で言えば社会情動的スキルのうち「目標の達成」と「情動の制御」といった部分での底上げが必要であることは、領域のねらい・内容の部分からも示唆されている。

さらに、保育者の影響が大きいのであれば、各保育者による理解差の影響も大きくなることが考えられ、保育現場での非認知能力に対する共通理解や、保育職全体での共通見解なども、これから重要な議論を生むことが想定される。保育者はもちろん、保育者養成の立場においても、非認知能力に対するさらなる議論やしっかりとした検証が必要であると言えるであろう。

おわりに

今回は「保育内容 人間関係」とのかかわりで非認知能力を見てきたが、日本の保育は以前から非認知能力的な発達を前提としており、日本型の非認知能力とも言えるところ（心情・意欲・態度など）をしていること、そして「保育内容 人間関係」は其中で大きな役割を果たすことが把握できた。

前述のように、非認知能力自体は世界中で議論が盛んに行われている。その概念をどのようにとらえ、どのように分析していくかは、これからたくさんの研究がなされていくと思われる。

小塩¹²⁾ は心理学で実証された15種類の心理特性をとりあげ、それぞれと非認知能力の可能性を検証することを通し、非認知能力が教育可能であること、多くの場面でより「よい結果」につながる可能性を高めるものであることを述べている。また、同時に心理学的な検証をすることで、効果量による数値化も可能になることも示唆している。

また、秋田¹³⁾ は「幼児教育をめぐる国際的動向について」で、幼児教育のその後の生涯にわたる学業達成、職業生活、家庭生活等で多面的に影響を与えることが、海外では明らかにされてきており、保育の質が発達に与える影響が正負いずれの影響を及ぼすこと、その一方で日本のエビデンスベースの幼児教育研究は十分ではないことを提案した。

このような状況を見る限り、非認知能力に世界の注目が集まっていること、幼児期の教育の可能性が世界で重要視されていることが見られる。このような社会的状況を活用し、日本の保育における独自性の根拠となるエビデンスベースの長期的な研究を行い、其中で「保育内容 人間関係」が非認知能力や認知能力に対しても、どのような関連性を持つのかを実証していくことが、今後ますます重要になっていくであろう。

引用文献

- 1) 内閣府. (2003). 人間力戦略研究会報告書. 内閣府.
- 2) OECD DeSeCo. (2003). The Definition and Selection of Key Competencies Executive Summary. OECD Publishing.
- 3) Angera Duckworth. (2016). GRIT: The Power of Passion and Perseverance. InkWell Management, LLC, New York.
- 4) Bowles, S. & Gintis, H. (1976). Schooling in capitalist America (Vol.75). New York: Basic Books.

- 5) Farkas, G. (2003). Cognitive skills and noncognitive traits and behaviors in stratification processes. *Annual Review of Sociology*, 29, 541-562.
- 6) Heckman, J. J., Stixrud, J., & Urzua, S. (2006). The Effects of Cognitive and Noncognitive Abilities on Labor Market Outcomes and Social Behavior. *J. LaborEcon*, 24 (3), 411-482.
- 7) OECD (2015). *Skills for Social Progress: The Power of Social and Social and Emotional Skills: OECD Skills Studies*. OECD Publishing.
- 8) 内閣府・総務省・厚生労働省. (2015). 相対的貧困率の調査分析結果について. 厚生労働省 (<https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/soshiki/toukei/tp151218-01.html>) (2021年8月11日13時35分).
- 9) 池迫浩子・宮本晃司 (2015). 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 国際エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆. ベネッセ総合教育研究所訳. *OECD Education Working Papers*, No. 121, OECD Publishing.
- 10) 無藤 隆 (2016). 幼児教育の効果と社会情動的スキルの指導. 無藤 隆・古賀松香 (編), *実践事例から学ぶ 保育内容保育内容 社会的スキルを育む「保育内容 人間関係」: 乳幼児期から小学校へつなぐ非認知能力とは* (pp. 1-11). 北大路書房.
- 11) ベネッセ教育総合研究所. (2016). 第5回 幼児の生活アンケート レポート. ベネッセ教育総合研究所.
- 12) 小塩真司. (2021). *非認知能力: 概念・測定と教育の可能性*. 北大路書房.
- 13) 秋田喜代美. (2021). 幼児教育をめぐる国際的動向について. 文部科学省 (https://www.mext.go.jp/content/20210720-mxt_youji-000016944_09.pdf) (2021年9月8日11時25分).

参考文献

- Hiroko Ikesako & Koji Miyamoto. (2015). 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成: 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆 (ベネッセ教育総合研究所 訳). ベネッセ教育総合研究所.
- 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所. (2018). 「非認知能力」の概念に関する考察. 一般財団法人 日本生涯学習総合研究所.
- Heckman, J. J. (2015). *幼児教育の経済学* (古草 秀子訳). 東洋経済新報社.
- 厚生労働省. (2018). *保育所保育指針解説*. フレーベル館.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省. (2018). *幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説*. フレーベル館.
- 中山芳一. (2014). 新しい能力の育成に関する一考察: 大学のキャリア教育と小学生の放課後に焦点を当てて. *大学教育研究紀要* 第10号, 161-170. 岡山大学.
- 中山芳一. (2018). *学力で測れない非認知能力が子どもを伸ばす*. 東京書籍.
- 西田季里, 久保田愛子, 利根川明子 & 遠藤利彦. (2018). 非認知能力に関する研究の動向と課題: 幼児の非認知能力の育ちを支えるプログラム開発研究のための整理. *東京大学大学院教育学研究科紀要* 第58巻, 31-39. 東京大学大学院教育学研究科.
- 日本財団. (2018). *家庭の経済格差と子どもの認知能力・非認知能力格差の関係分析: -2.5万人のビッグデータから見てきたもの-*. 日本財団.

無藤 隆, 古賀松香. (2016). 実践事例から学ぶ保育内容 社会的スキルを育む「保育内容 人間関係」. 乳幼児期から
小学校へつなぐ非認知能力とは. 北大路書房.

文部科学省. (2018). 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.